



モンゴル語を母語とするモンゴル民族は、モンゴル高原（現在のモンゴル国と中華人民共和国の内モンゴル自治区を合わせた地域）を中心に居住しています。「ゲル」とは、主にモンゴル高原に住む遊牧民が使用する伝統的な移動式住居のこと。（内モンゴル自治区では公用語が漢語なので「パオ（包）」と呼ばれています）

Ethnic Mongolians speak Mongolian as their mother tongue and mostly live on the Mongolian plateau, which is divided between the Mongolian Republic and China's Inner Mongolia Autonomous Region. The ger or yurt is the traditional movable dwelling used by the nomadic people living on the Mongolian plateau. (Since Chinese is the official language of the Inner Mongolia Autonomous Region, there the ger is called a Bao.)

写真資料提供

庫川尚益 (Shoeki Kurakawa)

吉田晃 (Akira Yoshida)

パネル製作

湯浅剛 (Tsuyoshi Yuasa)



ゲルの内部の様子。みな生き生きとした表情です。



カラコルム近郊のゲル



羊の放牧風景

モンゴルでは「ゲル」を住まいとする遊牧民族としての印象が強いのですが、現在は牧畜をやめて都市や農村に定住する割合がかなり増えています。首都ウランバートルなど都市部やその周辺では、半数近い人達が集合住宅（一軒家も含む）に暮らし、残りの半数がゲルに暮らしています。固定家屋の庭にゲルを立て、都市内であえてゲルで生活する人も多いようです。

ゲルは貧困の象徴でも、異文化の象徴でもなく、家賃も手頃なため、モンゴルでは最も庶民的な住居ですが、水道や風呂もなく、便所が共用であったり、長く厳しい冬には暖房に石炭が使われることが多く、ゲルから排出される煤煙による大気汚染の問題が発生しています。



ウランバートル近郊。ゲルと定住型住居が混在しています



ゲル ger / 包 (パオ)

ゲルは円形で、直径が5〜8.5m程度。中心の2本の柱によって支えられ、屋根は中心から放射状に梁が設置されます。壁は菱格子に組んだ木組みで、ピン構造の蛇腹式なので折り畳むことも可能。この壁と屋根の骨組みに羊毛のフェルトをかぶせて覆います。寒さの厳しい冬期は（-40℃）、屋根のフェルトを二重、壁を三重張りにして防寒し、暑い夏には壁の裾をまくり上げて、通風を確保します。

ドアがある正面が南向きになっていて、室内は左右に男性と女性の居住空間が分かれています。正面奥はもっとも神聖な場所で、チベット仏教の仏壇が置かれることも多いようです。中央にあるストーブを兼ねた炉は、暖房だけでなく料理にも使われます。頂部は開閉可能な天窗になっていて、換気や採光に用いられったり、ストーブの煙突を出すことも可能です。

ゲルは、おおむね夫婦を中心とする1つの家族が住むことが多いのですが、遊牧民たちは一般に2〜3帳のゲルからなる大家族集団（アイル）で、まとまって遊牧を行うことが多いようです。移動の際には、男たちが総出で行かない、数十分から1時間で分解、組み立てを行い、ラクダの背やトラックに乗せて運びます。



東日本大震災で活用された「ゲル」

石巻市北上町で、茅葺き屋根工事及び天然スレート屋根工事を全国的に請け負っている（有）熊谷産業さんが、東日本大震災で被災され、モンゴルから取り寄せたゲル（パオ）を建ててゲストハウスに利用していました。

■写真資料提供

庫川尚益 / (有) くらかわプランニング設計

吉田晃 / (株) 吉田晃建築研究所

■パネル製作

湯浅剛 / アトリエ六曜舎